

広報 すぎなみ

Suginami



支えあい共につくる
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並

3/15
令和3年(2021年)
No.2298

被災した地の、人の、
“心”を写し続ける。

東日本大震災から10年。写真家・石井麻木さんは震災後すぐに現地での支援を始め、人との交流の中で、その姿を写真に収めてきました。月命日には欠かさず東北を訪れ、変わりゆくまち、時が止まったままのまちを見つめ続けてきた石井さん。旧杉並第四小学校で開催中の写真展「3.11からの手紙/音の声」に込めた思いなどを伺いました。



特集



すぎなみピト

石井麻木

Contents — 主な記事 —

6 | 産前・産後の支援体制を拡充します 8 | 放置自転車ゼロのまちに 16 | 新型コロナワクチン接種の準備を進めています

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 | ☎ 3312-2111(代表) FAX 3312-9911(広報課直通) | 🏠 区ホームページ: <https://www.city.suginami.tokyo.jp/> | 📄 発行: 杉並区 | 📝 編集: 広報課



お知らせ

緊急事態措置が3月21日まで延長されました。

広報すぎなみは月2回(1・15日)発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。



すぎなみピト



interview

石井麻木

プロフィール：石井麻木(いしい・まき) 写真家/杉並育ち。美大を目指して絵を描いていた17歳の時、父親が使っていたフィルムカメラを手に東北を一人旅したことから写真を写し始める。CDジャケット、本の表紙、映画やライブ等のスチール写真を手掛けながら、東日本大震災で被災した東北での支援活動を続け、写真に取っている。3.11を伝える写真展は毎年開催を続け、現在、旧杉並第四小学校で開催中。



悲しみも笑顔も、そこに生きる人々の日常を伝え続けたい。

自らの足で現場に入り、目の当たりにした震災の光景

—石井さんにとって、10年前の3.11はどのような日でしたか？

私は平成21年からカンボジアの地雷原を訪れ、被害を受けた現地の人たちを支援する活動をしてきました。その活動に関する個展の初日を3月12日に控えて、都内の美術館でまさに設営中という時に地震が起きました。すぐにも東北に行きたくて必死で手段を探りましたが、現地に入れたのは2週間後。福島避難所を5カ所回り、東京で集めた物資を届けました。新潟県中越地震の時もそのように動き、カンボジアに向かった理由も同じでした。現地に自分の足で立ち自分の目で見たい。現場主義ですね。何が起きているのか、現地の人たちは何に困っていて何を必要としているのか。状況を自分で確かめたいという気持ちが、3.11の時も現地へ足を向かわせました。



「一歩を踏み出すために最初の1枚を撮ってくださいませんか？」と声を掛けてくださったんです。すごくいい笑顔で写ってくださった姿を見て、写真はこういう役目もできるんだと気付かされました。被災した人たちと関わりながら、報道カメラマンではない私なりの写し方で、私なりに震災を伝えていこうと答えを見つけていった感じです。

月命日に通い続け、東北はいつか「帰る場所」に

—今でも毎月東北へ向かい、地域の方との交流を続けていらっしゃるそうですね。

震災から5カ月間はほぼ毎週通い、避難所が仮設住宅に変わった平成23年8月からは月命日の11日に訪ねるようになりました。杉並区の交流自治体の福島県南相馬市も私にとってはなじみ深く、復興イベントのひとつ「騎馬武者ロックフェス」や「クリスマスライブ」には毎年欠かさず写真家として参加しています。なぜそんなに通い続けるの？と聞かれると、自分でもよく分からなくて。でも、使命感とか責任感とかそういうものではなく、東北に通い続けているうちに大きな家族がいるんな場所が増えたような感覚で、家族の笑顔が見たいし会いたいから行く。人と人との関係で生まれた気持ちが、自分を動かし続けているのだと思います。「行く場所」ではなく、私にとってはいつの間にか「帰る場所」になりました。

—コロナ禍では、行くのがかなわない時期もあったのではないのでしょうか？

はい、会えないってこんなに苦しいんだと思いました。一方で、電話やメールなどで変わらず交流を続け、会えなくてもつながっている事実は消えないし、つながっていることで安心できることも実感しました。これは偶然なのですが、17歳の時にフィルムカメラを持って、初めて一人旅に出て写した場所が東北だったんです。当時はさみしい気持ちを抱えていて、現像してみたら泣いているような写真ばかりだった。その時、写真には心が写るのだと知りました。写す人、写される人、見る人、三者の心が写るのが写真であって「写心」です。東北では特に「写させてもらっている」という気持ちで、いつも一枚一枚を大切に人と向き合ってきました。さみしい写真ばかり写していた自分が今、こんな温かな人の写真を写せるようになったんだとしみじみ思います。

「10年」はただの数字。何年経っても見つめていく

—3.11を伝える写真展を続けてこれ、今春は杉並での開催となりましたね。

毎年開催し、今回の杉並で39カ所目となります。小学校の校舎で展示できると知った時はとてもうれしかったです。というのも一昨年、原発事故の影響で今もまだ帰還困難区域となっている福島県双葉町の小学校に入り、撮影する機会をいただいたんです。そこで見たのは、あの日のまま時間が止まった教室の風景でした。きっと授業で発表する予定だったので、10歳の生徒たちが書いた「10年後の自分へ」の作文が教卓に積まれていました。それを書いた子たちは今年で20歳。それぞれの避難先で、笑顔で成人式を迎えているといいな……そんな思いで写真展の準備をしていたので、小学校を会場に3.11を伝えさせてもらえることに意味があるような気がしています。この写真展では「震災の写真だと思って来てみたら想像と全然違いました」という声をよく聞きます。それは笑顔の写真が多いからなのかもしれませ



—写真に残すようになっていたのは、どんな背景があったのですか？

写真で残そうとは思えませんが、毎週、車に寝袋と物資を積んで東北に向かい、炊き出しなどで支援をしていました。でも、ある避難所で段ボールに挿された一輪の花を見つけて。絶望が漂う中で、その花が私には小さな希望に見えて、気付けば泣きながらシャッターを切っていました。そして震災から1カ月後のある日、津波で何もかも失って写真も1枚も残っていないというご夫婦が「新し



東日本大震災10年特別企画

10年の記録 約80点を展示!

入場無料 会期中無休

石井麻木写真展 3.11からの手紙/音の声

東日本大震災直後から写し続けてきた東北の現在までを、写真とことばで届ける写真展です。

東京 ●旧杉並第四小学校(高円寺北2-14-13) 3月28日(日)まで、午前11時~午後8時(21日は6時まで) ▲特設サイト

福島 ●道の駅猪苗代(福島県耶麻郡猪苗代町大字堅田字五百苅1) 3月31日(水)まで、午前10時~午後6時(土・日曜日、祝日は9時から) ●双葉町産業交流センター(福島県双葉郡双葉町大字中野字高田1-1) 3月28日(日)まで、午前9時~午後6時

福岡 ●博多阪急(福岡県福岡市博多区博多駅中央街1-1) 3月31日(水)~4月13日(火)午前10時~午後8時

図文化・交流課交流推進担当 ☎3312-9415

ん。被災した人たちの中にはもちろん悲しみがあるけれど、喜びも、楽しい瞬間もある。震災の悲惨な面だけではなく、彼らにも日常があり、こんな笑顔もあるんだということを、ぜひ見てほしいです。

—被災した地と人々を10年間見つめ続け、今改めて思うことを聞かせてください。

10年というのは数字でしかなくて、節目や区切りと思えず、もちろん10年1カ月目もあるし、11年目も12年目も同じように日々が続いていきます。10年ですごく変わったところがあれば、時間が止まったままのところもある。その両面を目の当たりにするたび、いつも感情がぐちゃぐちゃになるんです。でも、少しずつでも建物の再建が進み、まちに活気が戻っていくのは本当に素晴らしいことだろうと思うし、これからも見続けていきたい。そして、10年間成長する姿を見せてくれた子どもたちの成長を今後もずっと見守っていきたくて、生まれたまに子どもたちが戻る姿もいつか目にすることができたらいいなと願っています。被災した方がいつか話してくれた言葉に「忘れられてしまうのが怖い」ということがあって。忘れない=関心を持ち続けることだと私は思うんです。ぜひたくさんの方に写真展を見ていただき、1人でも多くの方が3.11に関心を持ち続けてくれたらうれしいです。